

---

# **お馬怪盗と悪魔の麻薬**

暁月 麗華

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

お馬怪盗と悪魔の麻薬

### 【NNコード】

N2439Y

### 【作者名】

暁月 麗華

### 【あらすじ】

宝石怪盗をやっている青年セヴィスは、学校で最下位の成績をとりながら、秀才の兄ウインズとともに暮らしていた。

だが、ある日盗んだ真紅の宝石によつて、異世界にトリップしてしまつ。

その世界は、全く同じ人間が住んでいるのに宝石を主食とする悪魔が出没したり、人間を激変させる麻薬があつたり、学校が悪魔退治をする『ネクロス』の養成学校になつてしたりと、何もかも変わっていた。

それでも懲りずに異世界でも宝物怪盗を始めたセヴィスは、狂った性格をした銀髪の悪魔シユバルツにことじことく邪魔をされるのだった。

## 序章 真紅の宝石

今日は、兄のウインズに馬鹿にされるだらう。

教師に渡された茶色の封筒を見て、セヴィイス＝ラスケティアは思つた。

昔のウインズは、この封筒を開く度に偉そうな顔をしたといつ。だがセヴィイスから見れば、これはウインズの機嫌を良くするものであり、自分の機嫌を悪くするものでしかない。

こんなもの、作る方がおかしい。こんなもの、何の為に存在するのだろう。

でも、見ないといけない。

セヴィイスは教室に誰もいないことを確認し、封筒の中身を取り出した。

成績表と呼ばれる、忌々しい白色の厚紙に記された数字は、やはり五百分の五百だった。

「また最下位だつたな」

突然セヴィイスの横から現れたのは、幼馴染のハミル＝スレンダだつた。

「お前つどに隠れて・・・・・」

誰もいないと思っていたセヴィイスは、驚いて成績表を落とす。

「はははは放課後にセヴィイス一人が残つてたら絶対成績表を見てるもんな。だから脅かそうと思って隠れてたんだ。いつつも銅像みたいに無表情なお前が、あんなに驚くとこ初めて見たから思わず笑つちまつたぜ」

ハミルは成績表を拾つてまじまじと見つめる。

「へえ～体育の成績だけはすぐ一な

「テストなんて、どうでもいい」

と言つて、セヴィイスはハミルから成績表を勢いよく奪い取つて鞄に

入れる。

「出た！名前！お前テスト終わつたらいつつもそれ言つよな～」

「本当にことを言つて何が悪い」

「別に？・・・・・ていうかさ、お前おれから成績表奪うのすげー速くなかったか？」

セヴィイスから返事はない。

「お前なら泥棒できたりして？まあこれ以上怪盗が増えるのは嫌だけどな」

「・・・・・・」

「聞いたか？また怪盗フレグランスの予告状来たんだってよ」  
ハミルの父は『怪盗フレグランス特捜課』に所属している。その父を尊敬しているのか、ハミルはよく父の自慢話やフレグランスへの悪口を言つたりする。

それも、セヴィイスはどうでもいい、の一言で済ましていた。だが、例外がある。

「予告状の通り盗むとしたら、今夜だよなあ。今回の宝石があるビルは窓ガラスが頑丈だし、さすがのフレグランスでも割れないだろ？だとしたら逃げる場所が入口しかない。だから親父は入口に警察を集中させるんだって」

「そうなのか」

この話だけは例外だ。警察の防備情報を聞けるのは、このハミルと話している時だけだからだ。怪盗フレグランスの立場からすれば、この話を聞き逃すわけにはいかない。

「あれ？珍しくどうでもいい言わなかつたな」

「そんなことどうでもいい」

「あ、言つたな」

「・・・・・帰る」

「おい待つて！おれを置いてくなよー」

セヴィイスはいい情報が聞けたと思つと、本当に成績はどうでもよくなつた。

ハミルはいちいちしつこくて、時には邪魔と感じるが、怪盗からすればハミルの存在は重要だった。

「なあ、お前のロッカーにこんなもん入つてたぜ」

セヴィイスが学校を出る数分の間に、いつの間に人のロッカーを開けたのか。ハミルは路上でたくさんの白い封筒をセヴィイスに見せつける。だが、セヴィイスはこの封筒を知らない。

「何だこれは」

「おれは知ってるだ。これラブレターだろ。この色男め」

「ラブレターだと？」

ハミルは封筒に貼られたハート型のシールをはがし、一枚の便せんを取り出した。その差出人を見てハミルは目を見開く。

「おいおい嘘だろ？ ルビアちゃんだぜ？ これ。おれあの子狙つてたのになあ」

ルビアという少女は、学校内では有名らしい。だが、セヴィイスはこれもまた知らなかつた。

「ルビアとは・・・・・誰だ」

「知らないのかよ！？ ルビア＝クオーツといえば、学校一のお金持ちだぜ？」

「興味ない」

後ろでハミルのため息が聞こえた。

「そんなこと言つてると、誰にも好かれなくなるぜ。モテるうちに彼女作つとけ。おれなんか、好きだつて言つてもいつも『ごめんなさいの一言なんだぜ』

「生きて行く上で、女に好かれる必要はない。いるだけ重荷だ」

怒つているのか、黙つてハミルはラブレターを見つめている。

「大体お前は何人の女を狙つたら気が済むんだ。何回フラれても懲りないのか」

「へつおれは女の子と正義の味方だからな。だから美しい宝石を盗

んで女の子を悲しませるフレグラランスは絶対許せねえ」

ハミルはどうしてすぐに開き直つてフレグラランスの話題にしてしまうのだろう。こんな話題は、セヴィイスを複雑な気分にするだけだ。と言つより、ハミルの話題全てがセヴィイスを複雑にしていると言つてもいい。

「お前もな、この手紙をお前のロッカーに入れる女の子の気持ちを考える」

ハミルは手紙の束をセヴィイスに押しつけると、くるりと背を向ける。「じゃあな」

そう言つて、ハミルは目の前にある自分の家に入つていった。  
こんな紙きれ貰つて、嬉しいのだろうか。セヴィイスにはハミルの気持ちが分からなかつた。

分かつたのは、フレグラランスの存在は宝石好きの女に憎まれているということだけだ。だが、いくら女に嫌われようと所詮は他人。セヴィイスには関係ない。

そう思つて、セヴィイスは鞄にラブレターを突つ込む。それが、あの成績表の茶色の封筒に入つたことにセヴィイスは気付かなかつた。

ハミルの家の隣に、自分の家はある。ドアノブを握ると、テストの結果を馬鹿にするワインズの偉そうな顔が頭に浮かぶ。

そう思うと入る気が失せる。そこでセヴィイスはいつものどうでもいい思考を発動する。テストのことを忘れ、家の扉を開けるという我ながらなんともぐだらない思考だ。

「ただいま」

家に入ると、おいしそうな匂いが漂つてきた。どうやら、ワインズ

がハンバーグを焼いているらしい。ワインズが脂っこいものを作るのはなんとも珍しい。

いつも栄養分を細かく計算し、おいしくもない健康的な食事を作っているあのワインズが、ハンバーグを作つている。

「珍しいこともあるものだな」

セヴィイスは一言呴いて、ワインズのいるキッチンに入る。すると、

「遅いぞ。貴様、帰宅時間五時から三十秒遅れたな」

後ろを向いたままワインズが言った。

「三十秒くらい、別にいいだろ」

「罰として、お前のハンバーグは抜きだ」

「なつ・・・・・」

「今日のお前の夕食はこのワインズ様特製健康促進定食だ。光栄に

思え！はーっはっはっはっは！」

セヴィイスは舌打ちしようとする自分を堪える。ワインズが高笑いするときはいつもセヴィイスが馬鹿にされた時だ。こうなつたら反抗しても全く話を聞いてくれない。

「何がワインズ様特製健康促進定食だ。ただの玄米を山盛りにしただけだろ」

「何か言つたか、馬鹿弟」

ワインズはセヴィイスを睨みつけてきた。

だがその顔面を覆う鉄仮面を、ワインズは何故か料理中に着用している。それも眼鏡をつけた上に鉄仮面だ。

前にこの鉄仮面を初めて見たハミルは、笑いが止まらなくなつた。

「その鉄仮面、止めた方がいいと思う」

「何故だ？料理に唾が入つては不潔だからな、このくらいは当然だろう？」

「・・・・・クソ神経質が」

「フツ。料理<sup>エサ</sup>が出来だぞ。たんと喰らうがいい」

ワインズは鉄仮面を外し、料理を机に並べる。その献立はどう考へてもおかしい。ワインズ側には、美味そうなハンバーグ一枚に適量の野菜、白米だ。そのハンバーグは元々セヴィイスの分だった。

それに比べてセヴィイス側には、大きな茶碗に玄米の大盛りに、生の野菜、生卵。これが不味いワインズの健康促進定食。ワインズに逆らうと夕食はいつもこれだ。

「どうした？まさかこのワインズ様特製健康促進定食が気にいらな

「ことでも書かなか

「ああそうだ

「では、不本意だが貴様にチャンスをくれてやるつ」

と言つてウインズは水を一杯飲み、眼鏡を指で一度押し上げる。

今田は貴様の成績表が返つて来た

「はあ・・・・・」

ウインズが絶対に無理な条件を押しつけて、それができない人を笑

うのは昔からだ。チャンスという點で期待をするべきではなか  
た。

「ハミカル」お前の口とた

卷之三

セヴィイスは黙つて茶色の封筒を取り出してウィンズに渡す。それを  
ウィンズは慣れた手つきで開けて、成績表を取り出す。成績表を見  
たウィンズはすぐに笑いだした。

タにしたらどうだー

「冗談じゃない! 事実だ」

「ほんの番数を取つてよく冷静でいられるな！僕なんて一番を譲つたことなど誰にもなかつたぞ！」

「兄貴は特別なんだ。仕方ないだろ」

「金へ、じりやつたらじてな点数を取れるのだ」

何かが引っ掛けつて入らない。

「何だ、入らないぞ」

「ソーナスは封筒に手を突き込んで中は引いて掛けしていた物を取り出

「セヴィイス、これは何だ」

ウインズが取りだしたのは、先程ハミルがくれた女の子たちのラブ

レターの束だった。

「あつ」

取り返そうとするセヴィイスを振り切って、ワインズは便せんを声に出して読み始めた。

「『親愛なるセヴィイス様へ。わたくし、あなたのこと�이気が気にいりました。よかつたら付き合つて下さいませんか?返事はいつまでもお待ちしています。ルビアより』・・・・・だと?」

「・・・・・」

セヴィイスは頭を抱えて、黙りこんだ。

「貴様のような馬鹿を気にいる女がこんなにもいるとはな。最近はフレグランスと囁つ名の愚かな怪盗も出る。本当にこの世界はどうかしている」

それからセヴィイスは一言も話すことなく、夕食を済ませた。

夜十時半、セヴィイスはベッドから下りて部屋の窓から飛び降りる。ワインズは毎日必ず十時に就寝し、五時に必ず起きる。彼の生活時間は絶対厳守なのだ。

それに、その間は絶対に起きない。気付かることはない。

セヴィイスはこれを利用して仕事をしていた。仕事といつのはもちろん、泥棒だ。

予告状の予定は十一時。十時半に、セヴィイスのやる氣のない死んだ目が開く。

(俺の名は怪盗フレグランス。嫌われようと関係ない)

セヴィイスは、生まれつきの体術で屋根の上を飛び移る。何故こんなに人間離れした跳躍力を持つているのかは、セヴィイス自身も知らない。

今日盗むのは、最近発見された未知の真紅の宝石『ブラッド・エヴァイデンス』だ。

高値で買い取るから、どうしても欲しいという他国の人間が続出し

ているからだ。セヴィイスは、そんな人間たちに宝石を売つて金を稼いでいた。

セヴィイスが金を稼ぐ理由は、特にない。ただ盗むのが楽しいというだけだ。

「・・・・・」

宝石のあるビルの前にはたくさんの警察が立つていて、入口の反対側に回り込んだセヴィイスは、屋根からビルの一階の壁に飛び移った。

「スレンダ課長！今のところフレグランスの姿は見えません！」

「奴は近くまで来ているはずだ！十分に警戒しろ！」

ハミルの父ミストの声が聞こえた。警察はまだ自分に気づいていない。そのことを確認したセヴィイスは、窓に自分の短剣を差しこみ、鍵を上に押し上げて、窓を静かに開ける。

この窓はハミルの言う通り割つて侵入するのは不可能だ。でも窓は鍵さえなんとかすれば簡単に開く。たかが窓にこの怪盗フレグランスは敗れはない。

中は真っ暗で、誰もいない。セヴィイスの十メートルぐらい前に、その真紅の宝石はあつた。

「見つけた」

だが、誰も警備していらないというのも変だ。セヴィイスは辺りを十分に見回す。やはり誰もいない。ハミルの言つていた、入口に集中させるというのは本当だった。

宝石を守るガラスの蓋を取つて、真紅の宝石を盗る。防犯ベルが鳴り響く。

「フレグラムスが出た！！」

ミストの声が聞こえた。これで何度目だろうか。ミストの、「しまった！」

という声を聞くのは、聞く度に、笑えてくる。

セヴィイスは入ってきた窓から外に出て、再び屋根に飛び移る。今日は楽だった。

家に戻ってきたセヴィイスは、いつものように、真紅の宝石をベッドの下の宝石箱に入れようとした。

すると、どこからか声が聞こえてきた。

『ねえ、悪魔と戦つてみな～い？』

「だつ誰だ？」

焦ったセヴィイスは窓や扉を見回す。誰もいない。

『ブラシド・エヴィデンスを手に入れるなんてすごいわあ。普通の人間が触つたら燃え尽きちゃうんだけどね』

『この宝石が喋つているのか？』

『ああ、わたし悪魔の頭領のサキュバスつていうのね』

「悪魔？」

『わたしたちの世界はここと同じ人間が住んでるけどね、悪魔も住んでるの。今度からわたしの世界のセヴィイス＝ラスケティアとあなたで交代してもらおうかなあ～って思つてるの』

『何を言つているんだ・・・・・・・？』

セヴィイスは、悪魔の頭領サキュバスの言つてることが理解できずベッドに潜る。

『逃げても無駄よ。明日からあなたにはここに来てもうつからねえ』

これは幻聴だ。宝口が喋るはずがない。

そう思つてセヴィイスは眠つた。



## 序章 真紅の宝石（後書き）

少し苦手な学園モノに挑戦しようと思つて書きました。  
そう思つてたら、怪盗モノと悪魔モノも混ざつてきていろいろと力  
オスな話になりそうです（汗）  
あと上手くいけば下手クソな差し絵も投稿していきたいです（笑）  
文章も下手クソですが、  
アトバイスがあればよろしくおねがいします。○ren

# 1 悪魔の世界

「おい」

ワインズの声が聞こえる。

「おい、起きろ」

怒っているのか、語気が強くなつた。

「起きろと言つていいだらう！！」

はつとしてセヴィイスが起きると、隣に眼鏡を光らせたワインズが立つていた。

「いつまで寝ているつもりだ。貴様のせいで僕が仕事に遅刻したらどうする」

遅刻とはいえ、ワインズはいつも職場に三十分以上前に着いている。今更遅れても何もない。

「俺なんか置いて行けばいい」

「駄目だ。成績最下位の貴様が遅刻したら、また保護者会で僕が面倒な目に遭つてしまつ」

ラスケティア家に父と母はいない。優しかつた母は病氣で亡くなり、温厚な父は理不尽な事故に遭つて亡くなつた。なので、親の役目は全てワインズが受け持つている。

それに比べてセヴィイスは家では何もしていなかつたが。

「僕はもう行くぞ。朝飯は下に置いてあるからな」

そう言つて、ワインズは部屋を出て行つた。いつもの朝の風景だ。

「・・・・・」

『ねえ、悪魔と戦つてみなさい？』

ふと、昨日の悪魔の言葉が蘇つた。悪魔の頭領を名乗るサキュバスは、明日自分たちの世界に来てもらうと言つていた。だが今日になつても、世界は何も変わっていない。

「やっぱり夢か・・・・・」

セヴィイスは、ベッドから降りて宝石箱を開ける。もし今までと世界

が変わらないなら、あの真紅の宝石は必ずここに入っている。

セヴィイスは宝石箱を開ける。

「…」

そこに、昨日盗んだはずの『ブラッド・エヴァイデンス』の姿はなかつた。

「ない」

辺りを見回してもそれらしきものはない。

もしかして、ここはサキュバスの言つていた違う世界なのだろうか。それでも、『ブラッド・エヴァイデンス』以外の宝石はちゃんと揃つていた。

「お~いセヴィイス～！学校行こうぜ～！」

外から声が聞こえた。窓から顔を出すと、下に制服姿のハミルが立つていて。

「ハミル？」

ハミルは昨日までと何一つ変わっていない。やはり世界は変わっていないのだろうか。

そんなことより、こんな時間に学校に行つてどうするのだろう、とセヴィイスは思う。少なくともセヴィイスが起きる時間に行つても学校は開いていないはずだ。

「えつ」

壁に掛かっている時計を見たセヴィイスは驚愕した。

「お~い

ハミルが呼んでいる。

「今行く！」

セヴィイスの人生初の寝坊だった。

ワインズの朝食を食べずに、セヴィイスは外に出る。道路で随分待たされたハミルは少々機嫌が悪かった。

「セヴィイスが寝坊、か。珍しいこともあるもんだな」  
ハミルは変な目でセヴィイスを見てくる。

「珍しいのか」

「だつてよお、兄貴のせいで早く起こされたるつて面倒くせうひ言つてたのお前だろ」

「そうだな」

「おれなんていつも夜はフレグラーンスのこと考へてるから寝坊はしばしばだけどな」

セヴィイスは黙つて歩き出す。ハミルはそれについて来る。

「・・・・・」

「やつぱり警察を入口に集めたのは間違いだつたな。いくら強い窓でも、怪盗フレグラーンスには敵わんいつてのか」

ハミルはまたフレグラーンスの話を始めた。セヴィイスからすれば勘弁してほしの一句だつたが、それを言つわけにはいかないので、結局「どうでもいい」の一言で終わらせることがしかできなかつた。今やセヴィイスの口癖にもなつてしまつたこの「どうでもいい」は、ハミルが一度とフレグラーンスの話をしなによつにするために言つた言葉だつた。無論それは、全くと言つていい程効果が無く、現在ハミルがフレグラーンスの話をしているのが現状だ。

「でもやつぱり信じられねえよ。あのセヴィイスが寝坊つて・・・・・」

「しつこいぞ、ハミル」

「もしかしてさ、昨日悪魔に襲われたとか？」

ハミルの言葉を聞いた途端、セヴィイスは横断歩道の前で足を止めた。

「悪魔？」

昨日の出来事をハミルが知る訳がない。セヴィイスは無意識にハミルを睨みつける。

「そうだよ。最近、悪魔の野郎に襲われる人間が増えてるんだ。だから俺らが通うネクロス学園があるんだろ？」

ハミルは道路の真ん中で得意げに言う。

二人が通うネクロス学園は、至つて普通の学校だ。悪魔という未知の生物と何の関係もない。

「ネクロス学園と悪魔に何の関係がある」

セヴィイスは素直に思つていたことを言つた。

「あ？お前何言つてんだ？？」

正直なセヴィイスの言葉を聞いた途端、ハミルは横断歩道の信号が赤になつているにもかかわらずセヴィイスの方へ戻ってきた。

「寝ぼけたんのか？」

「つ！」

怒つているハミルから目を逸らしたセヴィイスは、彼に迫るものを見て息を呑んだ。

前しか見ていないハミルは気づいていないが、物凄い速さで大型車が迫つている。さらに、車の運転手は眠つていた。これでは止まれない。

「ハミル危ない！」

セヴィイスは叫ぶ。

だが、ハミルは大して驚く様子も見せず、ゆっくりと横を見る。車は既にハミルまで十メートルは切つている。

あれでは撥ねられる。

「へつこれくらい！」

ハミルが車と接触しそうになつた瞬間だつた。

セヴィイスは自分の目を疑う。周りにいた人々も驚いて歎声をあげている。

「ハミル？」

ハミルは、車を右手の掌だけで止めたのだつた。

「おれの魔力権に車なんかが敵うわけねえだろ

「ま、魔力権？」

「セヴィイス、何驚いてんだお前？いつものお前なら、いくらおれが

自慢しても『どうでもいい』で終わらせるくせによ

そう言われても、セヴィイスはハミルが車を片手で止められる程の力

があるとは思えない。

「まあおれもお前の魔力権には敵わないけどな」

「何のことだ」

「…………お前さ、やっぱり悪魔に襲われたショックで記憶が飛んでるんだろ？ただでさえ驚くことがないお前がおれの魔力権でそんなに驚くわけがねえ」

「知らないものは知らない。その事実は何も変わりはしない」

ハミルは怪しげにセヴィイスを見つめて、

「この世界で悪魔もネクロスも魔力権も知らない奴なんて重症だ」と言った。

「なあ、お前本当にセヴィイスなんだろうな？」

セヴィイスは疑われるはずのハミルに疑われた。

サキュバスは言っていた。自分たちの世界のセヴィイス＝ラスケティアと代わってもらつと。そんなことをして何になるのだろう。セヴィイスに交代する理由は分からなかつた。

「おれとお前は、頭領サキュバスを始めとする悪魔の野郎を倒すために、ネクロス養成学校に入つてるんだろうが！」

「そう…………なのか」

このとき、セヴィイスは確信した。この世界は、今まで自分が住んでいた世界とは違う、サキュバスの世界なのだと。自分は、本当に悪魔が住む空想のような世界に来てしまつたらしい。

とりあえずこの世界のことを知るには、ハミルに嘘について聞き出すしかない。

「ハミル」

「あ？」

セヴィイスが話しかけても、ハミルの不機嫌は治つていない。

「お前の言つ通り、俺は昨日悪魔に襲われたのかもしれない。そんな記憶がうつすらと残ってる」

「やつと白状したか」

「だから、いろいろ教えてくれ」

「お前がおれに頼み事か・・・・・まあお前が知らないといろいろと不便だしな。分かつたよ」

ハミルに頼むのも気が引けるが、仕方ない。悪魔のことを知らないと、おそらくサキュバスに馬鹿にされるだらう。それどころか怪盗業にも支障が出るかもしれない。

もちろんこの世界の怪盗フレグラーンスのことは、ハミルから自然に聞きだせるので聞く必要はない。

「何から説明すればいいんだ？・・・・・やっぱり悪魔からか。魔力権に関しては図書室で教えてやるからよ」

セヴィイスに頼りにされて喜んでいるのか、ハミルは一人で考えている。

「悪魔っていうのは、この世界に住みつく奴らなんだけどさ、宝石『ブラッド・エヴィデンス』を主食としているんだ」

「宝石を？」

「そう。『ブラッド・エヴィデンス』を食べないと奴らは生きていけない。

十年前、悪魔は世界を支配しようとしたけどな、ネクロスという一人の男に阻止された。『ブラッド・エヴィデンス』はその時この国の美術館や宝石店に散らばったんだ。そのせいで悪魔は『ブラッド・エヴィデンス』を求めて夜に人間を襲っている。奴らのやることは本当に甚だしいぜ」

真紅の宝石『ブラッド・エヴィデンス』。昨日セヴィイスがそれを盗まなければ、この世界に来ることはなかつただらう。この世界でもその存在はかなりの影響を与えている様だ。

「宝石を渡せば済むつてもんじゃねえ。どれだけの宝石を渡しても、悪魔の奴は必ず人を襲う。それに、

『ブラッド・エヴィデンス』を渡しすぎるとまた十年前のことが起つちまうまう。だから、ネクロスの様に悪魔から人を守るためにわれたちが通うネクロス養成学校があるわけだ。まあ悪魔に関しては

こんなもんか」

ハミルは丁度学校に着いたのを確認して、話を止める。

「じゃあ魔力権について説明してやるから、図書室に行こうぜ」

そう言つたハミルだったが、動こうとしない。

「どうした」

「あの子可愛いな。ちょっと待つてくれ」

「おい・・・・・・」

ハミルのナンパ癖はこっちの世界でも一緒だった。

「お嬢さん、おれと一緒に・・・・・・」

「あら？ 筋肉馬鹿のハミルさん？」

ナンパした少女は黙つている。言つたのはその隣にいた少女だ。少女は人を見下す目で、ハミルを見ている。

ハミルはこれが誰だか知つていて、学園一の大金持ち、ルビア＝クオーツだ。

「えつ筋肉馬鹿？」

「そろそろ。あなたはわたくしの一番嫌いな人種ですの。あなたの友人のセヴィイスさまはいらっしゃらないの？」

セヴィイスさまという表現にハミルは少し焼き餅を焼いた。

「セヴィイスはあっちにいるけどさ、いくらなんでも筋肉馬鹿って・・・ぐえつ！」

鳩尾に肘を叩き込まれてハミルは苦しんでいる。そんなハミルに目もくれず、ルビアはセヴィイスの方に走ってきた。

「昨日のお手紙、読んでいただけました？」

ルビアは昨日のラブレターのことを言つてているのだと、セヴィイスは理解した。

「ああ、読んだ」

「お返事を聞かせて頂けませんか？」

昨日の出来事のせいで、ルビアのラブレターのことはすっかり忘れていた。考える暇さえなかつた。そもそもこの女と一緒にいたとも思わないが。

「悪い。俺は女に興味ない」

と、セヴィイスは素直に言う。これで諦めるのが普通の女。だが、

「うふふつわたくしは諦めませんわ」

ルビアには逆効果だつたようで、ルビアは笑顔のまま少女と一緒に去つて行つた。

「全く、こんな俺のどこがいいのか分からぬ」

セヴィイスは玄間でぼそつと呟いた。

怪盗フレグラヌスは女に嫌われているはずなのに、セヴィイスは好かれていた。

そんなセヴィイスをハミルが恨みの目で見ていた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2439y/>

お馬怪盗と悪魔の麻薬

2011年11月23日11時46分発行